【資料紹介】

白華文庫蔵・長三洲「韻華楼日記」（明治五年）について

川邉　雄大

解題

筆者は、これまで東本願寺の海外布教（琉球・中国）について研究を進めてきた。この過程で、中国布教に従事した松本白華[1]・小栗栖香頂[2]、琉球布教に従事した田原法水[3]・小栗憲一[4]、朝鮮布教に従事した奥村圓心[5]など、幕末期に咸宜園[6]およびその系統の漢学塾で学んだ僧侶が、明治期に海外布教や本山で中心的な役割を果たしていたことを明らかにし[7]、咸宜園と真宗僧との関係について研究を進めてきた。

なかでも、松本白華は幕末期に大坂の広瀬旭荘塾（大坂咸宜園）で学び、その後は宗名恢復（明治四年、一向宗→浄土真宗）・海外視察（明治五・六年）・中国布教（明治十年～十二年）を行うなど、宗門で重要な役割を果たした。

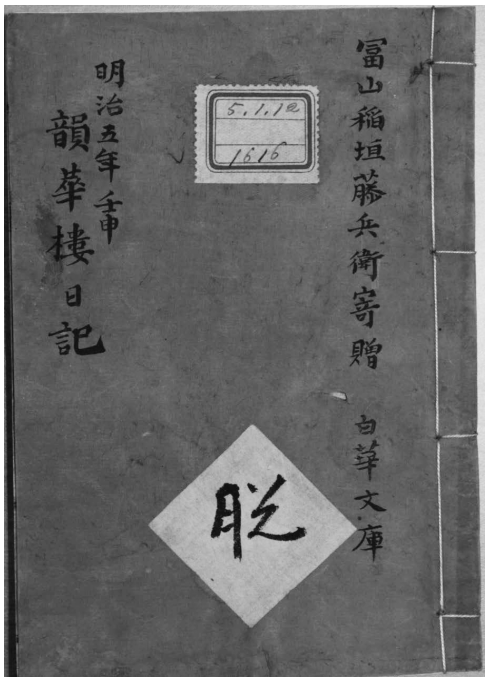
筆者は、白華の旧蔵資料を所蔵する自坊本誓寺（石川県白山市）や、白山市立松任図書館白華文庫（同）[8]などで資料調査を行い、幕末明治期の活動や中国布教について研究を進めてきた。

とくに、明治五年（一八七二）から六年（一八七三）にかけて、白華が引率して行われた東本願寺一行の海外視察では、咸宜園の人脈、具体的には長三洲[9]の人脈を通じて、江藤新平との関係を構築したことによるものであったことを明らかにした[10]。

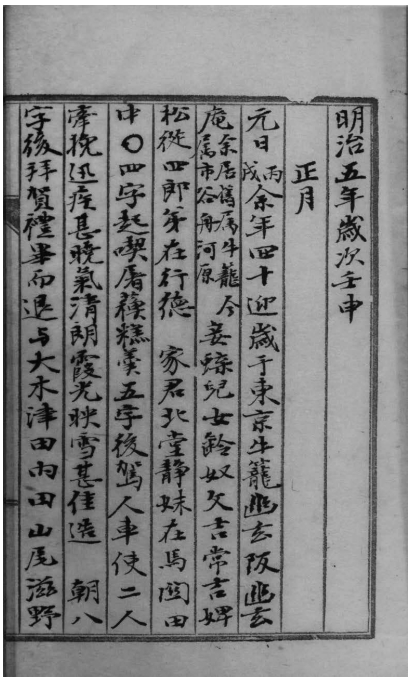
また、同文庫に所蔵する小栗栖香頂「水築小相伝」（慶応二年）[11]・平野五岳「五岳道人 古竹邨舎詩鈔」（明治十六年以前）[12]・「真宗説教」（明治十一年）[13]の翻刻を行った。

このたび翻刻した、長三洲「韻華楼日記」（以下、「日記」）も、白華文庫に所蔵する白華旧蔵資料の一つで、韻華楼とは長三洲の室号である。「日記」の内容については、すでに拙稿「明治五年における長三洲と咸宜園門下生―白華文庫蔵「韻華楼日記」を中心に―」[14]に詳述するので、本稿では簡潔に述べたい。

「日記」は、明治五年（一八七二）元日から同年十二月二日[15]までの一年間に亙って全て漢文で書かれており、表紙（〔写真



〔写真1〕「韻華楼日記」表紙（白華文庫蔵）



〔写真2〕「韻華楼日記」一丁表
（明治5年（1872）元旦）

1」参照）には、「冨山稲垣藤兵衛寄贈　白華文庫／明治五年壬申／韻華楼日記」と、中表紙には、「韻華楼日記　起明治五年壬申正月」と書かれている。寄贈者の稲垣藤兵衛や、「日記」が白華の手許に渡った経緯については不明であり、現在のところ白華文庫以外に所蔵が確認されていない。

従来、長三洲の日記は明治六年（一八七三）に書かれた『明治六年文部大丞学区巡察日記（西南日記）』が知られており、すでに中島三夫氏によって翻刻もなされているが、[16]『西南日記』は手帖に鉛筆で小さな字で書かれているのに対して、「日記」は線装の冊子体で十六行の用箋に毛筆で書かれている。そのため、両者の筆蹟は大きく異なっており、「日記」は長三洲の直筆によるものか判断できないが、本文は楷書で書かれ筆勢が終始一致しているので、長三洲もしくは別人がのちに浄書したものと思われる（〔写真2〕参照）。

さらに、「日記」は『西南日記』と同様に、父梅外（一八〇九～一八八五）を「家君」、弟冰（一八五六～一八八三）を「四郎弟」、妹静子（一八四六～一九一一）を「静妹」、長女齢子（一八六九～一九三四）を「齢児」または「阿齢」、妻蝶子（一八四九～一九三三）を「蝶児」と表記しており、記述される内容も年譜[17]などに記載された内容と一致する。また、父梅外や弟冰ら家族の動向、職場（文部省）での出来事、来訪者、咸宜園門下生らの消息について記されているの

で、長三洲の日記であると見て間違いない。

次に、「日記」が書かれた明治五年（一八七二）当時の長三洲について見ていきたい。

長三洲は、二月五日に文部少丞に任ぜられ[18]、「学制五篇」を起草している、二月から五月にかけては「文部省学制原案」を清書し、四月十五日には正六位に叙せられ[19]、同十九日には宮内省侍読となっている[20]。三月に撰文を依頼されていた振武隊招魂碑が五月に萩城内に建立された[21]。八月三日には学制が頒布され[22]、十月二日には学区出張があり[23]、同十三日には文部大丞[24]に任ぜられ、同二十七日には教部大丞を兼ねている[25]。

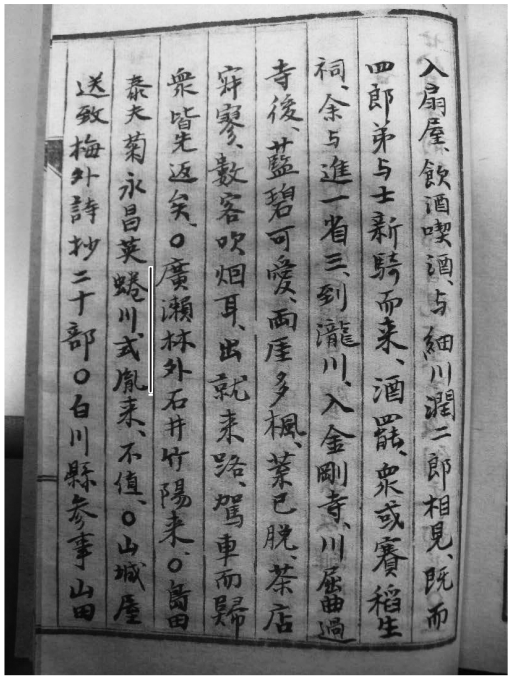
このように、明治五年（一八七二）の長三洲は、文部官僚として学制の制定などに多忙な一年であった。

白華については、面会や海外視察にあたって紹介状を依頼した記述などがある[26]。十月二日の記述からは、長三洲は白華の海外視察については詳細を全く知らされていなかったことが分かる。真宗僧では、白華のほかに小栗栖香頂[27]・小栗憲一[28]ら咸宜園関係の東本願寺僧侶や、大洲鉄然[29]・島地黙雷[30]・赤松連城[31]など周防出身の西本願寺僧侶の名前も度々見える。

このほか、職場内（文部省）での出来事、友人知人の来訪、咸宜園門下生や旧友の消息などが記されており、これによって当時の長三洲の交友関係が判明する。

長三洲は当時、文部大丞として文部省に出仕し、のちに教部省との合併にともない教部大丞も兼任した。「日記」には、文部卿大木喬任のもとで野村素介・西潟訥・瓜生寅・逵青浥らとともに学制の制定などに携わっている様子や、侍講（毎月一・二回程度）に関する記述、山尾庸三・井上馨・木戸孝允・長松文助（幹）ら長州系の人物との交流が記されている。このほか、当時の著名な文人・学者である西毅一[32]・川上冬崖[33]・蜷川式胤[34]（〔写真3〕参照）・川田剛[35]らの来訪が記されている。

さらに、広瀬青村・広瀬林外・隄静斎[36]・西島正浦[37]・竹中寛[38]・遠田澄庵[39]・清浦奎吾[40]・深水東吾[41]・亀谷行蔵（省軒）[42]・横井寿一郎（古堂）[43]・田代俊二[44]・田辺巌介[45]・片山重範[46]ら咸宜園関係者の


入扇屋飲酒喫酒与細川潤二郎相見既而
四郎弟与士新騎而来酒器衆或賽稲生
祠余与進一省三到瀧川入金剛寺川屈曲過
寺後苔藍碧可愛両厓多楓葉已脱茶店
寂寥数客吹烟耳出就来路駕車而帰
衆皆先返矣○廣瀬林外石井竹陽来○島田
泰夫菊永昌英蜷川式胤来不值○山城屋
送致梅外詩抄二十部○白川縣参事山田

〔写真3〕「韻華楼日記」六四丁表
（明治5年（1872）10月26日）

来訪や消息などが多く記されている。とくに幕末期に長三洲を匿った秋月橘門・新太郎親子は維新後上京し、市ヶ谷船河原町幽玄坂にあった長三洲宅の東隣に引越して来ており[47]、両者の関係は非常に親密であった。この年の末に起こった山城屋和助事件についても、秋月新太郎から詳細を聞いている[48]。

また、長梅外・三洲親子が中心となって結成された漢詩結社・玉川吟社[49]の同人である、秋月親子をはじめ・隄・西島・竹中・遠田らは、頻繁に長三洲宅を訪ねている。これは、咸宜園門下生の中でもとりわけ玉川吟社の同人と長三洲は親密であったことを裏付けるものである。

筆者はすでに当時咸宜園門下生の中には、官界で活躍していた長三洲を頼って仕官を求める一面があり、具体的には長三洲が江藤新平を通じて失職中の隄静斎の出仕を働きかけていることを指摘したが[50]、「日記」にもその旨の記述が見られる[51]。さらに、「日記」には広瀬林外・青木錦邨（※樹堂）・吉雄正安（※菊瀬）については長松文助に正院記録局への就職を依頼している旨の記述がある[52]。

このように、「日記」は明治五年（一八七二）当時の長三洲や、彼を取巻く咸宜園の人脈などが明らかとなるだけでなく、学制の制定など明治初期の教育史について研究する上でも重要な史料となると思われる。よって本資料の重要性に鑑み、このたび全文を翻刻することとした。

凡例

一、漢字表記については、原則として現在通行の印刷字体を用いた。

二、本文中の斜線／は改行を表す。

三、本文中の括弧（　）は加筆を表す。

四、本文中の句点および擡頭は、原文に従った。

翻刻

〔表紙〕

冨山稲垣藤兵衛寄贈　白華文庫／明治五年　壬申／韻華楼日記

〔中表紙〕

韻華楼日記　起明治五年壬申正月

〔別紙〕

長三洲自筆ナランカ

明治五年歳次壬申

正月

元日　丙戌余年四十迎歳于東京牛籠幽玄阪幽玄／庵余居旧属牛籠今属市谷舟河原妾蝶

児女齢奴父吉常婢／松従四郎弟在行徳　家君北堂静妹在馬関田

／中○四字起喫屠蘇糕羹五字後駕人車使二人／牽挽迅疾甚暁気
清朗霞光映雪甚佳造　朝八／字後拝賀礼畢而退与大木津田内田
山尾滋野

（一表）

等相見松平源太郎亦在源太郎福井県人前年／在越後知之于兵間
今不知為何官帰折園梅一／枝挿瓶去年来寒威尤烈園中梅樹未放
只墻外／一株僅破数蕾耳是日晴暉吹煖頗有春意○加／藤鋏臣渡
邊脩斎父子西島青浦小野勝三郎松／平晋之丞来賀○四郎弟自行
徳帰○夜与晋之／丞徴市谷歌者三名聴常盤津曲
二日　晴寒○内田編輯助三吉周亮佐藤海軍大

（一裏）

佐来周亮贈烟草内田還葛無（奇）李今生二巻佐藤／乞其文草刪
正○菊池太郎塚行蔵来賀○終日／接客欲出不能（果）○中村来乞画牛
賛為書一絶曰／輸君無窘柬起卧忘栄辱得意自年々数声春野／緑
三日　三浦五郎来賀○一字騎造　朝拝賢所路／与柳原大丞倶話
支那条約事件柳原云未有定／論而其結穴無所底止余謂此事想有
人攪乱其

（二表）

間者也不然政府已無異議外間已無異議寺島／少輔亦云外務省決
無異議而至今未決是尤可／怪使臣何足言所惜者外人測知　廟廊
深浅也／詣神祇省聴宣教講義於　御座罷拝／皇霊八神殿而退遂
到濵町賀旧知事従三位公／邸賀杉山木戸二氏而帰○遠田澄庵隄
省三片／山重太郎佐原宗禎来賀不値○天野重郎（旧称冷泉／雅二郎）柬送其所
編続風担遺草乞刪潤

（二裏）

四日　為始政儀日礼服到文部省咸会賜酒饌二／時畢訪内田編輯
助（名正雄）観其所蔵古銅鹵及明／人扇面書画冊其他器玩有十硯斎円形
小研極／佳津田中判事佐藤大佐同席与佐藤約明外日／訪其廉而
帰賀山尾庸三氏○伊藤弥二郎自横／濵柬云刻書資成于本地某近
為租税寮吏員敢／告
五日　暁起窓光爛然推戸雪華大作須臾理松圧

（三表）

竹四望如銀臘雪入春未消加以新雪終日不已／殆可盈尺為冬以来
大雪十字駕人車造　朝是／日為新年宴会賜文武臣僚酒饌于　御
前伶人／奏楽献舞其儀与豊明節会同風飄雪花撩乱撲／舞衣極妙
宴罷三字帰家雪降益甚瀹茶擁炉終／日間極○藤井八十衛来
六日　出賀松平加藤二氏雪晴日煖為入春第一／美日○交野十郎
来賀○午後駕人車訪佐藤海

（三裏）

軍大佐飯倉寓居内田編輯助亦至居依高面南／南（変）宕高縄両山蜿蜒
相抱其缺萬家鱗布家之外／品海一碧帆檣往来徳川氏所築砲台如
列星其／外軍艦碇泊者六七海之外房総之山委蛇如引／帯々雪映
日眺望絶佳入夜而帰○山尾庸三吉／川圭之進来不値
七日　山口顕蔵菊池六郎来小酌○日高頼三来／○欲訪杉山前日

杉山云将観劇故止○青浦東

（四表）

曰三吉周亮来云請先生同游柳槁願枉駕及往／三吉廣崎玉屋青浦在焉四郎弟亦至同駕人車／到両国橋上青柳楼徴歌妓四名杉山亦来会入／夜衆皆散余与青浦駕人車到蔦楼又小酌而寝

八日　七字与青浦帰今暁外神田火帰時已熄○／是日初視省務○鉄然来云大使（一行）在米利堅為大／雪所厄未知実否○昨日高根生来贈蠟燭

九日　晴暖将造省庁宿直録官報曰今日始

（四裏）

御覧海軍操練故賜休暇○玉川堂蔦屋来賀／○与四郎弟連騎而出四郎馬不調而後独到／湯島観伊勢外家骨董又至不忍池畔訪菊池／六郎既而四郎亦至六郎進酒席上為作書数／葉紅林武治亦来日晡辞与四郎騎環池上遂／自上野入筋違門過通町鎌倉河岸而帰○安／藤外六来致其兄飯牛去年七月東○東欽十／郎生田大議生堀博山（口）増寿郎来駕（賀）皆不値

（五表）

宜決議条件数十剴切論之○四字遂到川長／楼（々）婢云大島官人已与長谷川仆西島二公泛／舟到向島而別艤一舟以待官人至乃乗舟泝／流春意溶々風慢日温頗適游意到白鬚祠下／出舟到梅荘大島長谷川西島森川寺埼及妓／三名在茶房余独逍遙于梅林間梅花未放一／蕾而園中梅樹少古樹観不甚佳而諸子已返／舟乃上舟而飲篷窗洞開芙蓉積雪可掬放舟

（五裏）

中流夕陽在波風光甚佳余遂酔而卧既為衆／所揺舟在三谷壕随衆上陸遂到林楼妓七八／名来侑酒余又酔卧蔦楼婦強邀到其家卧不／知衆人起落也○数寄屋河岸火

十五日　賜暇○青浦来起余乃出到平松店浴湯／喫飯而帰到下谷訪雲光生供酒飯観書画出／訪晴湖女史又供酒駕人車別青浦返○桐原／仁平来不値致三輪岩六東○昨日山県交野

（六表）

来○三吉周亮来話○黙雷来還金○連日饒／春意

十六日　奥竝継有吉昌平中村土木頭和智鴻太／郎田中平三来○午後乗暖独出自市谷過四／谷入麹町出赤阪門訪隈省三家竟不得又入／赤阪門経麹町観一丸骨董店訪山県氏狂介／近構新宅地旧有梅花百餘株亦好園也小酌／深話到夜而帰○聞浡浪徒聚伊勢山田　皇

（六裏）

大神廟地将謀不軌地方官悉捕之○夜小雨

十七日　省中諸葛一郎来話一郎豊浦人曾在越／後相知今在文部省中○小島泰堂東贈海苔／○山尾氏妻来賀正贈海苔○四郎欲之印旛／県以舟不発而止先是余欲帰省馬関以事未／果且余帰則往来費用極大以故欲使四郎帰／而県庁許否未可知故使四郎説河瀬以其故／如不許則将辞職蓋四郎亦有不満故也○夜

到神楽阪聞歌　（七表）

十八日　天草人松本式二者来（致）青村本月七日東／請見余猶在寝辞之青邨東中附其新年七律／一首為松本生先容且云府県官員去冬皆免／而猶就職如故某等未有新　命請善処之○／日晡松本式二復来曰某欲留京而嚢資已罄／願為先生僕従不諧請先生為選一佳処某元／欲為官未得為幕客以待時余温言辞之○連城来曰某等洋行有日請以廿日集尾張町泉／文楼作留別宴請見臨黙雷亦同請也○小島／泰堂来○四郎之行徳○亀谷行蔵致横井寿／一郎去年六月東　（七裏）

十九日　昨夜寝後聞雨暁起則雪降樹石皆白矣／○英人弗児別幾来与学制局事大木瓜生辻／等皆会○交野東還金告明日之浪華○東山／県山県亦将之浪華　（八表）

二十日　与瓜生等議学制○四字赴尾張町泉文／楼連城黙雷光田等迎接秋月新太郎石舟杉／山青浦鉄然等在徴妓十餘名飲酒已酔日已／晏辞駕人車独到蔦楼夜半後返家○暁地震

廿一日　有吉昌平来乞書画○隄省三松平晋之／丞来○松本式二来又申前請余為謀之隄省／三々々云近日華族四五十名設学于愛宕下／或収貧書生未可知将為問之　（八裏）

廿二日　衙散瓜生同来小酌○岡田正平来贈菓／不見○田邉佳三郎桐原甚平来甚平云将留／学俄魯斯○畏三堂来去年所命米士魁米法／山水戴巌犖墨竹蔡琀墨鳳装潢成

廿三日　夜四郎弟行李自行徳至謂弟必帰而不／帰

廿四日　朝四郎弟帰云乞帰省于河瀬見許遂辞／職而帰矣○腹候甚不佳不上衙○日晡与四　（九表）

郎弟出歩自神楽坂北西過牛籠径田間到関／口渡川此為水道町玉川水之所過也到音羽／入護国寺寺頗宏壮多桜花寺前市街数百家／皆為之成市盖旧幕時此寺殊為尊崇今則冷／落如一孤邨右折上小山又右折而東為小石／川大塚町到伝通院後而下山西到小（日）向渡川／到築土過菴小酌而帰○夜聴藁棚劇話

廿五日　起則雪大降深已数寸不減前日侵雪跨　（九裏）

馬上衙寒甚雪華終日不已到暮始止○昨日／田邉佳三郎来示梅道人墨竹乞鑒題字数百／言頗有文衡山筆態為明末偽造無疑

廿六日　仁孝天皇忌祭以事不　朝○昨雪未／全消景光猶奇拉四郎弟蝶児阿齢牛門上舟／到墨隄浴千歳湯小酌平岩楼而帰○青浦来／贈二月書画会報単三紙乞画不値○津田東／送示外務省廻礼一道派理事官于清国委限　（一〇表）

及照会李鴻章曾国藩文也文中有三事一援／我与欧西改定条約事

因欲改刪領事権利商／民罰欵等一援萬国公法欲裁徹脩好条規第／二条調処之約一援我礼制欲裁徹刀械之禁／以上三件余不知其謂戯柬柳原下一転語以／告微意然三件不至不得不争之故旦循黙不／言

廿七日　小幡彦七来彦七為宇都宮県権令欲興

（一〇裏）

小学校故来謀又示呉竹虚愃南田二画冊乞／鑒皆非真蹟○松岡哲夫来贈蛮橘二顆乾章／魚○松平晋之丞介其妻之姉夫木原兵三郎／見静岡人也

廿八日　畏三堂来見乞字○四郎弟将帰馬関以／故不上衙○岡田正平来○秋田県人七条平／六者来見出長埼人渡辺真者所著度量便覧／曰真去年四月病歿其子渡謀刊其遺著敢乞

（一一表）

序言諾之○瓜生寅来

廿九日　日暁地震○先是北隣籬破犬入我園言之／北隣補之隣人謝窮不能作乃雇人将造之以／隣人多積芥籬根不可改作移一二尺向外隣／人間之既而拒之余乃要隣人作籬隣人建敗／板腐竹以補之余亦誚之隣人遂乞我作之許／移一二尺○瓜生請明日臨其居○夜松平晋／之丞来話○昨夜四郎話石原正雄事余始知

（一一裏）

之正雄元肥後卒祇役江戸為其同僚甲乙所／欺凌辱侮遂殺甲乙而遁数年前余在九州募／兵正雄業俳諧在府内棄従余又従至長府居／馬関去年春甲乙子知之謀官報仇長府捕之／以与肥後不知其下落正雄為人淳朴其推刃／出不得已罪在甲乙而自言若逢讐人固不厭／死也長府之処之未可為有権惜乎

二月

（一二表）

朔日　菊池太郎安藤格助（乙卯）（即卯六）吉川圭之進／竹中等来○拝石者静岡県人善篆刻与／畏三堂来見○午後到瓜生三寅氏佐藤主記／及小蘋在座飲酒徴土妓夜帰○七字地震

二日　在省与佐藤尚中長谷川泰相見○夜晋／之丞来雨降煖甚庭前梅花稍開

三日　雨降不已与瓜生約六日往観向島梅花

四日　祈年祭　賜暇○四郎弟将以明日発作郷

（一二裏）

書与広瀬茗渓児玉雪庵柬曰一昨年老父／母俛二君娶高田泉梅庵氏女事実出意／外時僕在薩州不知之及帰到馬関梅庵携／女与雪庵兄来待僕矣而僕将有東京之／行不可留而　父母促某行礼　父母之命雖／不可違然婚姻人生一生之事夫婦百年之／始固不可草卒也而僕不得已於　父母俛／強行礼而即日東矣故使梅庵氏女即帰

（一三表）

在茗渓子所以至今日僕初念欲速離婚而／乞之　父母而議論不決所以因循経年也僕／已有小妻弱女而別納夫人徒増煩累非所／以

営生故断然離婚以除僕之累以啓女／之前途事之始在二兄事之終亦不得不俛／二兄請急告之梅庵氏以如僕意是固両家／之幸也云々呈　家君曰某将帰迎而不能故／使子金弟代往萬般之事皆委之弟請速

（一三裏）

収装上東上之舟云々与近藤四郎言俸禄之事／与白石正一郎大庭一平小松謙次郎言迎／父母事且作与馬関諸子書亦告迎　父母意／皆嘱四郎弟理事路費金二百両及人事物／及贈小松画等皆附四郎弟○秋月新太郎／青浦来○渡邉脩斎及対州邨山舒賀来／不見○文部省伝式部寮牒曰明日十字礼／服造　朝

（一四表）

五日　四郎弟発到横濱米船之発当在明日／○十字礼服造　朝式部寮伝宣任文部／少丞奉　命行謝宮内省是日杉山川本／皆進官退到文部省視事而帰○石川県／沢旧金人加藤久也野口磊三来見磊三四年前／来山口相知

六日　是日与瓜生杉山約往観向島梅花夜来／寒疾大作悪風甚東瓜生告病乞刻期他

（一四裏）

日○高根正也来話○佐藤実吉来○忍病／対客体気太悪遂卧

七日　卧蓐不起○松岡哲夫西名清風来話○／晋之丞贈梅花

八日　猶不能起卧床撰度量便覧序与七／條穆○四郎弟自横濱東曰郵船始以／今日発

九日　病少間○畏三堂与京師北茂者来観

（一五表）

余所蔵書画器玩○夜地大震

十日　病大劇○竹中来前日有以十一日観劇之／約以余病請改卜

十六日○木下靖来

十一日　松岡勇記来診病

十二日　家君本月五日東郵便送到東日得池龍／帰便東大佳爾等二人不必帰而吾東行意／已決矣昨日爾母与妹至日田意在詣已等／芳耶神与告別而移葬蔵之助昌之于日田

（一五裏）

上釣之事為第一義高田之事宜急処置山／口禄米之事近藤已為受付大庭一平已被／免云々想四郎弟今日已到馬関矣事必皆／完或聞六日藝州地大震未知確否

十三日　松岡哲夫来○前日竹中致秋月小相去冬／東即日作荅東付之○瓜生寅来

十四日　病大佳○津田東送伊達東曰十五日於／中邨楼会去年使清一行人員且送柳原鄭

（一六表）

再之支那請見臨云々○杉山東問病且曰／土州人福岡四位任文部大輔○欲取西隣隙／地作牒文及図乞借地于東京府東西瀉為／謀之西瀉荅曰借地之事近日一切廃之使／出資買地既有頒令敢告○竹中来申／十六日約○夜暖甚雨下○先是嘱佐藤主／記刻小印二

顆昨日成

十五日　午後始上衙是日有中邨楼之約以風　（一六裏）

寒猶悪止帰路訪渡邉脩斎近移家於／小石川蓼々槁東○東青浦約赴明日観／劇之約

十六日　蝶児拉齢与松平晋之丞夫妻観劇余／与青浦赴竹中氏招駕車到第二街劇日晡／皆散与青浦竹中到蔦楼又一酌而帰青／浦来宿○佐藤実吉来不値

十七日　昨日冒風是日不上衙○中邨芳左来○　（一七表）

静間雅助来

十八日　与福岡大輔相見○衙散与瓜生同歩到／昌平橋買舟過柳橋到水心楼小酌徴／妓三名帰時駕人車到俎橋過瓜生妾家／而帰○伊藤弥次郎来請所借木戸氏二百／金延還期二月○聞今日午前有白衣浪／士十許人遽入宮門戍卒阻之不可暴行／遂以小銃殪其五人餘皆逸去宮門姑　（一七裏）

閑甚想其着落何如也○岡山人岡埜松三／郎草加廉男携花房大記東来請見問学／制○瀧弥太郎来自磨飾磨

十九日　大洲鉄然木下靖来贈鶏子○広瀬孝／之助来自京都贈茶及京都扇不値已而／自川田氏東云川田甕江亦欲納交願見臨川／田氏余辞孝之助乃来話致青邨東々／曰林外東上之意蓋数年来宜園頗衆生　（一八表）

徒解藩以来頓衰故以東上深求文部教／導之意而後施之于人云々又曰某郷者免／官前月十八日復任典事敢告与林外小酌／林外宿

二十日　林外去之川田氏○与大木卿論学制未／見定説○渡邉方荣（今更名定）来見云数日前／来自小倉県

二十一日　昨日来驟寒朝来雨下雑雪○山口顕　（一八裏）

蔵田辺佳三郎松平新之丞来○長野周蔵／来見小倉県人曾従学余云前月来入東校／因得藤川小助真淵六蔵（旧称鈴木任三）兄弟近状／○佐藤実吉来請改刻前日小印不満余意／故也○伊萬里県人邨山舒賀来為大島友之／丞促其所乞書画也○飾磨県人堤艮来／請見不値○桐原仁平自横濱東告之／魯国且言不能還前日所借之金之故　（一九表）

二十二日　衙散訪渡邉脩斎門閉不入○学制／局前日薦松岡哲夫今日奉十二等出仕命

二十三日　聞前日闖入城中者皆為修験者前夜／到正門乞入戍兵不許天明門開入戍兵拒之／報式部寮寮命曰若説諭不可則縛之不可／縛則撃之戍兵遽鎖正門及中仕切門数十人／砲撃之殪数人縛数人蓋修験者誤聞　朝廷／廃佛欲越訴而為戍兵所拒遂抜刀暴行也然　（一九裏）

朝意元不在殺故戌兵蒙譴云
二十四日　雨下○遠田澄庵贈醃菜麦糕○哲夫／来云数日耳遽痛
不聞人語故不能造省
二十五日　杉孫七郎来○衙散訪渡邉定
二十六日　隄省三来○午後出到俎橋与瓜生同／到両国橋瓜生小
妻従訪杉山不在到中村楼／是日会主為久保田蔦峰賓客雑還不容
坐／去到梅川楼青浦亦来徴妓酌酒頗酣俄
（二〇表）
報火起問之曰為日本橋上屋上涼棚望之／是日風自西来甚急火勢
須臾散漫烟気／漫空日晡返家火光益熾既自聞火自旧／会津邸起
兵部省燬踰濠到数寄屋河／岸尾張町一路木挽町築地等皆燼火到
夜／半未滅
廿七日　加州僧梅隠来訪
廿八日　岡山県人草加廉男加藤次郎請見辭
（二〇裏）
○渡邉定来話○梅隠柬乞書画○草学／制案五篇成呈之大木卿学
制案多取孛佛／二国之法参以和蘭其一篇大中小学教課及／制度
四篇学費五篇海外留学生規則輔余／者為瓜生杉山柳本三子
廿九日　日高頼三来○西瀉訥来乞書○作呈／家君柬発之郵便
晦日　趣早退衙与瓜生駕人車到上野歩入
（二一表）
山中桜花開者既到八九分游賞久之／上野樹林陰森皆数百年老樹
桜花間／厠其間亦皆柯老枝古淡紅純白繡錯／数十株尤有幽峭之
趣唯游人雑操茶店／酒肆連接咲語係肉聒人為可惜也下山到不／
忍池畔上大和屋楼命酒既而杉山亦到徴妓／小酔本庄元宮津知事
偶過楼下喚上楼帯／醺復到花下是日雨俄過游人皆走帰
（二一裏）
日暮花光不瞑殊有妙境各別駕車而帰是／日観游人中兵士甚多有
酔而怒者有戯／而叫者什々伍々罵行人慢婦女折花枝／敢巨者
各々在肩蹣跚往来其醜態甚聞／前日土佐兵卒酔酗殺書生一人皆
投獄無／制如此不可不慮
三月
朔日乙酉　中邨芳三来乞振武隊招魂祠碑文
（二二表）
○菊地隆棟来○先是聞二月六日山陽一路／地大震藝州尤劇山崩
石墜有死者不／知馬関地方何如前日呈柬　家君問安自／有二月
五日柬久無音信想四郎弟経紀已妥／　二親柬来不出半月也
二日　早退到湯島骨董舗伊勢卯帰訪木／戸氏青浦不在到麹町一
丸氏而返○数日前／廃兵部省置海軍陸軍二省○前日火災
（二二裏）
紙幣寮焼
三日　加藤次郎来話○聞昨夜日本橋地方／灰○蝶児赴山尾氏招
○岡県岡大助来訪／大助原僧名一空今為神祇省官員余曾／相識
于種田○進藤与之助来○青浦来話

四日　終風揚沙○以病不上衙○岡山県人某／々来不値
五日　以病不上衙○蝶児拉齢観上埜桜花
（二三表）
○小島泰堂来云近日帰下総七日設別宴／請見臨○大分県人百渓
龍蔵物集高見／来見○浅沢清風来見○岡山県人某々来見
六日　田邊佳三郎隄省三竹中雲光吉川圭之進／来○三潴県人田
代某来云田代俊二之族／○吉川話安井仲平之子某久在横濵仲平
／頑固目不視洋物而其子則学洋字近日自／横濵帰遽斫仲平傷蓋
発狂也有憤其
（二三裏）
父頑而不開化故狂及此歟余曰開化至欲／斬父亦没可奈何
七日　杉山来云前日大木卿云今日請会其家／午後同行余諾同造
省大木東曰今日／有事請明日見臨○佐藤実吉改刻印成
八日　二字与杉山同訪大木氏大木氏居霞関／車中逢両三人促坐
酌酒深話省中事務到夜／帰○前日藤井八十衛来言伊藤弥次郎所
借
（二四表）
金事○去月廿六日之災人民流離者多故三／職各捐月廩金若干賑
之史官伝意于／文部省各捐金余謂是極属姑息天災流／行無処而
時而無之前日如山陽山陰地震／家屋壊崩有死者以其遠而不見無
官員捐／金事東京則以在目前逢恤何其有幸／不幸乎県委之令府
委之知事民之災青／地方官之責也且火災之起前此不知其数
（二四裏）
後此又不知其数前此未嘗有捐恤後此果／有捐恤乎治国家者姑息
如此是謂恵而／費余甚不取而為斯説者余知之矣余於／是有深慮
焉
九日　終雨与瓜生杉山等議省中事務○聞二／月六日石州震
災死者百五人傷者二百四十七人／廿六日東京火災戸数四千
八百七十四戸焼失死／者八人傷者六十人石州則県令給葬埋金
（二五表）
建病院療傷者炊粥飯与生者東京府発／金三千八百三十五両賑之
○前日丹波生野管／下奸民騒擾豊岡県厳行捕緝斬七人絞／三人
十日　与瓜生杉山奥山細川西潟等論事于卿／大丞○下衙与瓜生
赴杉山招入夜帰○隄／生東問左院事先是薦隄生于江藤故／也○
杉宮内大丞東乞画
（二五裏）
十一日　神武天皇祭○前日有富源兵子兵蔵／者来致貞永文右東
不値是日復来○菊／地太郎渡邊定篠窪友之丞来○湯浅祥／之助
来訪○東江藤言隄生事江藤荅／曰非敢忘也唯不遑及之○定云千
原夕田／至自日田
十二日　余所居地庚午冬仮之于東京府近日廃／借地官悉売之立
沽券以納地租其市民
（二六表）
所有亦皆立沽券今日作図及願買書致之／戸長云今日吏曰不在○

改省中諸官坐席／皆合之一○瓜生来乞画

十三日　皇上幸文部省及東校奏任官／以上送迎于門外拝謁于行殿　皇上駕／馬車太政大臣驂乗騎兵警衛前後行／儀美甚衆皆歓喜　上観省中諸官執／事及博物局午後還幸　賜酒省中諸官

（二六裏）

○三字与瓜生杉山奥山西瀉買舟到墨沱隄／花既無幾堤上游人甚衆自白鬚祠畔上渡／船到槁場過今戸観芳原桜花駕車到／柳槁飲梅川楼皆散与瓜生又飲于信乃／屋而帰○山本述作来旧称由太郎

十四日　文部省開博物局已数日観者如墻○／田邉佳三郎来

十五日　前日為佐藤実吉書題枯木竹石図詩

（二七表）

誤脱二字実吉乞補塡為補之○青浦東／乞博覧会門券余不蔵一葉謝之○静間／雅介来○以病不上衙昨日来南風揚沙／温暖困人

十六日　終風為瓜生三寅序其所訳啓蒙智慧／環○中邨芳三岡千吉郎佐藤伝之助来／○今暁芳原地方火

十七日　日晡雨下○昨日山内昇隄省三来

（二七裏）

十八日　明日　上将幸南校　皇后将覧博／覧会有故止○新聞紙云二月六日地震雲／州亦頗劇近日淀川蒸気舩破裂○前日／火災今戸有明大七諸楼皆燬○是日終／雨泥濘載塗○奴文吉蹉跌傷面部

十九日　雨不已道路濘甚

二十日　昨日正院牒曰大小丞一人明日造　朝／松岡以病不出請余往是日風雨寂暴

（二八表）

駕人車到　朝史官有所問委詳荅之而退／困憊尤甚終不上衙作東報大少丞○午後／雨微休近日天気屢変而馬関之信不来／甚為之憂不知　二親已上途否○夜杉山／荘一郎来小酌天晴見星荘一郎誘予駕車／游蔦楼

廿一日　朝帰隄省三瓜生寅来前日江藤東曰／隄生将用之教部省而忘其居処煩先生為

（二八裏）

遞致招牒省三蓋為教部八等出仕○千原幸／右衛門自金杉東贈博多帯○境二郎旧称永蔵／自山口県東至

廿二日　昨夜幸右衛門及劉安吉来安吉石舟／之族也幸右衛門約以二十四日同訪内田氏／小酌而去○杉山云西瀉東某請諸君同臨／放衙後同住何如余諾四時与瓜生杉山奥／山同到西潟氏小酌而返○夜広瀬孝之助

（二九表）

遠田澄莽来小酌。

廿三日　大分県僧香頂来訪香頂戸次人旧称／大戩余相識久前日白華来言香頂在浅／草本願寺子院○東杉宮内大丞言竹中／武之丞事○加藤直鉄二月廿日東自水沢／至○亀田宇太郎者来見前日静間雅助／介之于予○聞大久保伊藤将自米帰未知／其故○是日

天始晴朗而暁俄寒

（二九裏）

廿四日　前日与幸右衛門約是日同詣内田氏観／其蔵器退衙身気不佳因遣常吉于内田／氏柬幸右衛門告不能往之故○小栗憲一来／訪憲一旧称大珎大分県戸次僧香頂弟／今為監部居麹町

廿五日　蝶児等観博物会

二十六日　岡大助渡邉脩斎浅沢清風来○前／日三條家人山口彦次郎者為美濃人棚橋

（三〇表）

衡平乞書画是日来余疑衡平為棚橋大／作族問之彦二郎云其弟也大作盲而篤／学余在大阪交善彦二郎曰今無恙

廿七日　謝病不到省○千原花渓来示黄石斎／書楊龍友画山水程達墨竹三幅○午後／四字四郎弟奉　家君北堂而至静妹従／焉豊浦人梅本某亦陪　家君北堂強健如／常云廿三日発馬関舟中僅五日是日朝八

（三〇裏）

字達横濱南野一郎時田実白石正一郎渡／邉貞衛門天馬老驥（筑前巴木人長谷川驥太郎今称天馬老驥居下関）／等柬到　北堂二月中之日田蔵之助昌之改葬／事畢三月朔日帰馬関日田馬関都属無事

○東南野一郎

廿八日　不上衙○木戸参議二月十一日自話聖東／発柬及小学規則書一巻至曰以正月廿一日到／話聖東聞大久保伊藤帰自米未知為何等

（三一表）

事件

廿九日　不上衙○方荣来云明日為亡母小祥聊／供薄饌請賜臨

四月

朔日甲寅　陪　家君北堂出游静妹四郎弟蝶児女／齢梅本奴常吉従詣湯島天神到池端訪／菊池氏妻供洛河出游上野辨天祠遂到浅／草而返小飲于浅草祠前小楼帰路赴脩斎

（三一裏）

氏招与林外麻生三造隄平兵紅林伊九郎相／見

二日　松平加藤山尾木戸氏室皆来賀　家君至／○僧白華来宿

三日　松平晋之丞来云自駿河帰晋之丞為農／将游学外国而其室家有紛紜故欲使其妻／子居余宅地請之余々諾之○午後与大木卿／同観湯島小学校小川町女学校

（三二表）

四日　方荣哲夫来○昨日新太郎来云其父橘門／翁将来是日托哲夫柬秋月竹中

六日　陪　家君北堂拉静妹蝶児阿礼牛籠上舟／至両国泝墨沱川上墨隄自三囲祠歩到白／髯祠観梅花庄小酌平岩亭返渡東橋過浅／草倉前而帰

十日　退衙路堕馬幸不傷而打撲両肩背大疼

十二日　不上衙

（三二裏）

十四日　式部寮牒曰明日弟十字著礼服造　朝

十五日　造　朝式部寮伝　旨賜位記曰　叙正／六位拝　命之宮内省賀　皇太皇后駕至／出至赤坂離宮賀　皇太后前十一日　皇太／后自京都至故也

十六日　陪　家君北堂拉静妹蝶児阿齢到浅草／代地訪内田九一氏照相過柳橋到若松町訪／日新堂蔦蔵不在到横山町午飯観柳原襍

（三三表）

貨古器店而帰○豊後府内人某々来致安東／元達後藤仲次徳応寺吟松東○使四郎弟／乾松平氏庭池取其金鯉四十餘頭移之前池／○高根正也隄省三来

十七日　作荅元達仲次吟松東○遠田澄庵与菊池／三渓来三渓為土浦儒員贈其所著晴雪楼詩／○彦山安達升来

十八日　式部寮牒曰明日弟十字礼服造　朝

（三三裏）

十九日　造　朝式部寮伝　旨曰文部少丞長某／　命兼侍読奉命退之宮内省与杉大丞／議而帰

廿一日　陪　家君北堂拉静妹蝶児阿齢婢由観／猿若弟三街演劇瓜生亦拉其妾来

廿二日　左右肩既瘳上衙○昨夜石町火

廿五日　宮内省牒曰廿七日弟十字造省

（三四表）

廿七日　造宮内省与侍従長河瀬安四郎議事

上欲学字余専任之○訪広瀬林外不在

廿八日　昨日作与木戸参議書及小画巻発之／于西島氏蓋伊藤等又将到来米利堅追及／大使也

晦日廿五日　陪　家君赴白華浅草寺招同飲／東橋外八百松楼

五月

朔日甲申　陪　家君北堂拉四郎弟静妹蝶児阿

（三四裏）

齢游両国観劇聴歌帰路訪杉山生

二日　以病不上衙○買馬○林外来

三日　秋月小相緒方素一郎来小相以朔日此夜／宿○詣宮内省侍上学書帰路訪木戸／山尾二氏

四日　小相去

五日　雨下○素一郎来致新太郎東○宇佐人時／枝重明来訪重明称繁樹余曾留其家数

（三五表）

日重明以幕府嫌忌繫日田獄戊辰春得免／奥竝継弟也○菊地太郎来○聞四月初旬／新潟之乱已平

六日　雨降終日○東伊藤弥二郎

七日　雨

八日　午後自文部省到宮内省侍学書畢／賜菓○　家君訪秋月小

相于愛宕下夜宿
九日　弥次郎荅柬至

（三五裏）

十日　辻鈎拝石至拝石刻余石字印成
十一日　雨不出游〇山県大輔来
十二日　近藤四郎来不値致片山喜八元称治右門柬／近藤盖随従三位公而来也
十三日　午後退省到宮内省
十四日　支那人龔慎甫来訪龔慎甫去年従余／等到天津北京者
十五日　退衙訪交野十郎〇奥蘭田阿部柳所

（三六表）

畏三堂与支那人梁文玩来訪偶隄省三来／同話
十六日　与四郎弟陪　家君游日本橋京橋中通／観骨董舗而帰
十七日　小松謙二郎柬到
十八日　到宮内省侍学書畢到愛宕下訪秋月／小相父子木下靖亦来同飲而帰〇竹中／寛来贈酒

（三六裏）

十九日　雨降　不上衙
廿三日　上乗軍艦于品川巡幸伊勢大阪京／都山陰九州四国諸地参議以下扈従六十餘／人〇賜暇
廿四日　病不上衙
廿五日　是日須到宮内省慶　主上発輦以病／不出
廿六日　青浦来乃陪　家君牛籠僦舟到墨沱

（三七表）

隄観茶会八席是日楓川等骨董舗逢相聚設／茶席十席既困不観二席而返与三浦鳥尾／及関雪江相見
廿七日　遠田澄庵与支那人江献書友山来筆話／献書就医在澄庵氏也
廿八日　聞先是水戸乱未知其顚末又聞柳川乱
廿九日　発書于大阪河内屋吉兵衛欲購梅外詩／抄也〇山県蔦蔵宮口成吉来話

（三七裏）

晦日　聞新治県参事某屠腹死盖失人心故也

六月

朔日甲寅　陪　家君北堂拉四郎静妹蝶児阿齢游／木戸氏染井別墅微雷雨下六字帰〇白華／来不値
二日　遠藤兵輔来
以下無事可記故久不記反多所佚漏
廿九日　陪　家君赴小栗憲一招秋月父子白華

（三八表）

及長崎僧同飲

七月

朔日癸未　青木錦邨秋月新太郎元田直藤川三渓／来〇午前詣杉山氏江藤新平来先是江藤有／洋行之命故与杉山謀餞之且有所説話

玉／川堂三河屋及妓二名来飲到日暮散雨下同／玉川堂帰○天野御民来不値

二日　不上衙○前日津田真道送示柳原自崎

（三八裏）

陽贈外務省書今日還之花房義質○紅林／伊九郎来○大庭一平来

六日　午後与杉山赴江藤新平約鶴田司法明法助／清涼寺雪爪同会話到夜聞常盤津曲而帰

七日　賜暇五字陪　家君北堂拉静妹蝶児阿／齢藤助牛籠乗舟到両国橋下納涼

九日　正院有召到則移省之事○先是正院下／所上学制命曰学制現今自後之目的一依

（三九表）

所奏但額金之事非改正財政之後不決云々／是日卿輔以下相会再議将刊行天下也○／片野西島来

十日　杉民治来贈菓子○議学制

十一日　三宅要助来自上海云柳原品川等前三日到此／要助従之也要助見逐于木戸氏故因余欲謝前過／也

十二日　聖駕自西巡還

（三九裏）

十三日　議学制畢○帰路訪瓜生生

十四日　賜暇三日○賀于宮内省及赤坂離宮。

十五日　辻忠兵衛来○瓜生寅山本述作菊地義太郎／雪爪来○訪毛利従三位君于濵町与宍戸大輔／同舟而帰

十八日　皇后還自伊豆温泉以故停侍書

廿三日　侍書

廿六日　陪家君北堂游浅草観支那大男詹五九者

（四〇表）

身長八尺餘別有欧洲小人二名姉年二十餘弟／亦二十皆長不過三尺与可奇観

八月

朔日丑癸　交野竹中大庭等来○前月二十二日大風／陸軍省兵隊屯所倒有死者

二日　文部省移常盤槁内旧津県邸○学制刻／成頒告天下

三日　渡邉定与尾州人丹波某来見某旧為僧

（四〇裏）

学于宜園今為大分県籍為教部省官○上衙／午後到宮内省侍書賜白布一端及画扇五握／○帰路過一丸氏訪杉氏不在杉転秋田県令／○先是孛国人西設魯者来盖聞大阪開成所／教師約破故欲自薦也今日律篤児等再有雇／約故東西設魯謝絶之○東杉重華言竹中事／○渡邉定又来伝丹羽某言

四日　小倉県人木下慶賢者来致広瀬青邨柬

（四一表）

五日　宇都宮県参事小幡図書致柬乞撰洋字／教員二三名○昨日過牛込門内一家窓内有呼者／瓜生与佐藤誠也訪之而話乃佐藤宅

地○大／庭景明拝文部官○渡邊脩斎来
六日　宇都宮大属某来致小幡意云得洋書教員／○沢田震太郎服部章次安藤格三天野御民／来○大庭贈魚○訪木戸氏青浦不在到山県／交野不在訪杉氏不在路逢之問以野邨素介

（四一裏）

事野邨数日前来木戸氏杉云素介固有意于文／部而井上曰大木頗有不喜素介意故欲使之／為茨城県令而素介不欲故将有別議云々余云／大木恐無其意然當一問而後議杉云十二日赴秋／田任訪鳥尾陸軍少将而話
七日　不上衙柬杉山言素介事請試偵大木氏意／○昨日広瀬林外来先是余柬長松文助薦広／瀬林外青木錦邨吉雄正安三人于正院記録局

（四二表）

既而林外拝命
八日　侍書
十三日　暁地震頗甚○数日来寒疾不出是日省／中会議学制力疾詣省故不侍書○柳原前／光来話
十四日　野邨素介拝文部六等出仕○以病不上衙
十五日　衙中頗覚悪寒急帰○秋月小相来是／日為市谷八幡祭日喧闐殊甚○夜寒疾又劇

（四二裏）

十六日　品川領事来病不見○大昨日三吉周亮来
十七日　以病不上衙○瓜生寅来○前日司法権大判／事玉乃東平将上衙有人要路刺之被傷既而／捕之盖市人某（本郷人）数有訴事而為玉乃所阻／故啣怨至此也○福田伊八来侠平子
十八日　以病不侍書○美濃人棚橋衡平大谷茂條／来衡平棚橋大作弟為大作致意并乞托大作子／大作今在尾州○山根秀助来云近日帰県

（四三表）

十九日　大木卿柬云廿二日与野邨杉山二君見臨／○棚橋衡平柬贈菓子乞書○晋之丞近／日将之上海托其妻児於余先是晋之丞／請余作居於余門内置其家人是日設酒／餞其行青木錦邨偶至同飲○青浦来／○小栗憲一来○柬杉山約廿二日同往大木氏
廿日　夜来疾又劇卧蓐発汗○野邨杉山／吉松三子来話

（四三裏）

廿一日　染谷重三郎菊地六郎兄弟来
廿二日　岡本霞兄者来輯録墨林今話（蔣寶齡子延号霞）／竹所著中人名将刊行之乞余序○辻棐来
廿三日　不侍読○柬野邨杉山約午後到大木氏○／坂新吾来○杉山来同駕車衝雨出到築地／精養軒大木在焉野邨亦到談論飲酌至夜／而帰
廿四日　外邪未去以故不上衙

（四四表）

廿五日　始上衙視事

廿七日　詣宮内省誤以為廿八日也
二十八日　侍書
二十九日　学制頒布以来省務頗劇学校生徒等事／漸次就緒中小学教則亦刊刻告成四方之望／省務之発日有生色但定額之決未出是尤／可憂
晦日　聞焚茨城県城藤田東湖之子亦在其中

（四四裏）

九月

朔日（癸未）　岡山県人中川横太郎来○竹中寛出納来／平渡邉定来
二日　家君北堂拉静妹蝶児等游芝増上寺○／紅林武治東至○前日来山梨県民乱聞陸軍／省出兵又聞前日鎮台兵（因州伯州兵）一隊逃将之国／止之品川未知其故然兵卒無紀不就軍律／可見

（四五表）

三日　侍書帰路与作間正之助遇言岡竹城事訪／青浦野邨不在○吟松東至○加藤直鉄妻来
四日　槙邨京都府参事到省言広瀬青邨事／槙邨不諾
五日　不上衙○陪　家君游湯島観骨董舗与／本誓寺白華遇下男坂与三吉周亮遇同／返過其廁周亮供酒肴日暮帰○岡竹城／東謝不来

（四五裏）

六日　副田楽三天野御民西島青浦来○片山重／範来為橋本鉞太郎致意云鉞太郎今為大分／県官員○晋之丞将以明日之上海作与品川／忠道東托之○日晡陪　家君北堂拉静妹蝶児／散歩到市谷四谷観津守邸庭地窪然作池流／水帰之決然数頃老樹環繞頗為幽邃惜近／日射利者環池架屋数十椽紅鐙青旆以招／游客幾無隙地而老木亦逢斬伐真俗殺

（四六表）

人逐到四谷投鰻魚店喫飯而帰○先是／岡本霞兄者抄墨林今話中人名作小冊子／乞序今日為書之
七日　省中横山寿一郎来見云近日帰京都府乃托／致意于青邨○十餘日来陰雨無牢晴今日雨／大降道路泥濘杉山云前日与江藤約今日／与長氏同訪衙散後乃同乗車到江藤氏新／平不在又与杉山同到三河町入三久楼喫洋食

（四六裏）

而別○長松幹東還支那紀行○松平新之／丞発之上海
八日　雨益甚終日夜不已○今日正院令下以二百／萬円姑為文部省定額四月以来定額之議／久不決論辨百方至是始定○侍書宮内省／○川本清一来乞書翻訳書題字○阿齢昨／月来寒冒発熱○頒布中小学教則○岡山県西／毅一中川横太郎来夜雨益暴聞雷○今明日

（四七表）

鉄道開業式行奏任官以上皆会新橋鉄道／舘迎　駕以雨甚止
九日　暁雨歇天晴極為美日○西潟訥瓜生寅広／瀬孝来○福井県人青木某為東京府官員／携野邨介東来見○交野西島来同出乗／

車到今田戸有明楼飲酌月気映水妙甚夜／深与交野同宿

十日　朝帰上衙与卿議省内釐革事○岡本霞

（四七裏）

兄来贈寒具○阿齢熱不退呼吸促迫咳嗽甚／呼佐原及渡邉定乞診○白華来不値云将游／西洋各国乞余作書為紹介在海外知己既而又／東請乃作与品川弥二郎福原往弥静間健介／光田三郎書与之

十一日　阿齢病不瘥東瓜生寅代懇橋本一等軍／医来診橋本足羽県人為橋本左内弟医治有／名既而橋本至乞治○岡節作間正臣来○招野

（四八表）

邨杉山西潟三子議省中事務供酒飯野邨不／至日晡来亦供酒飯○侍従東索進法書作／一紙上之○明日有開鉄道儀　駕臨之因賜暇

十二日　与書於文部省當直令告以病不候鉄道／館之故于式部寮○家君拉奴常吉往観鉄／道開業○阪新吾来○阿齢病大間

十三日　与大木卿議省中釐革事○侍書○橋本来診／阿齢病大瘥○渡邉定来○賞月極佳朧々如

（四八裏）

春月想去年今夜自支那到長崎也○楠潤治／来○今日正院令廃編輯寮省中置大中少／督学

十四日　省中奏任官頗有黜陟野邨素介為少丞池／田細川奥山有邨免大助教少教授徒皆為某／等出仕佐藤少博士免本官専任少典医其／餘多有変更○竹田忠質来○今日琉球人参／　朝四五日前琉球正使副使賛議官以下三十

（四九表）

許人来　朝館愛宕下毛利氏邸或云琉球人／到台湾所殺者数十人故来訴也未知果信○／隄省三来不値○馬関人魚安者東乞借金未／審其故

十五日　省務多繁至夜八字始退衙○東橋本一等／軍医今日　駕幸越中島観陸軍操練橋本／盖扈従也○今日為神田明神祭

十六日　落合源三高島玄勇諫早已次郎（ママ）賢

（四九裏）

介来見○肥田昭作来○津久井遠因四郎弟借／金十五円○山県迂一西島青浦来

十七日　青木某来乞書画○高島張輔（旧称玄勇）／来贈烟草乞書画○阪新吾来○山田神社／遙拝○東橋本軍医乞薬○夜殊暖知雨近／也推窗明月満天朗然清徹絶無雨意

十八日　暁雨乃降○今日以観師範学校作書与／宮内省告不侍書○与大木卿野邨少丞迂肥

（五〇表）

田等観師範学校議教方○松岡哲夫致吟／松書云淡渓帯来吟松贈洞簫楊子（皆手製）及五／加木（云投之酒中呆甚美）其所作俳句松岡云淡渓近日将／拝趨○昨日田代俊二自馬関東　家君又亦／其所著馬関開港論

十九日　本省判任官三十許人罷四郎弟亦免／○与井上馨相見○岡節来言杉山妻事○竹／中寛来示元人欧陽玄小楷雪賦字極絶妙

（五〇裏）

学太令十三行右軍曼倩賛而帯古隷華／意紙亦甚古印二日永興日翠竹山房其真／偽不可辨要出名人手無疑云索価五十金／○菊地隆棟来○夜西潟来話

二十日　学制頒布以来未派出官員大木卿欲余／出余諾之大木又欲野邨出余伝其意野村／明日将来議○津久井遠来○阪新吾来／○言奥山事于大木卿○青木成一柬乞書

（五一表）

画

廿一日　白川県人清浦奎吾者来見云常行寺子（ママ）／宜園門人又云深水東吾今年歿○副田楽三／長野周蔵来見云将帰小倉県乞書画○／厚東次郎助来云昨日自浪華来

廿二日　天長節第七字朝奏任官以上賜酒饌於／　御前有楽如新年宴会式宴罷到文／部省代卿受判任官拝賀○木下慶賢来

（五一裏）

○加藤直鉄来云自水沢県帰○秋月翁与伏／見西養寺某佐伯西教寺淡渓来供酒而話／余乙丑在佐伯為俗吏所逐到築水留西教／寺数日頗有徳于余西養寺致黙雷自佛国／巴黎柬○厚東柬約廿四日観劇○昨日落／合源蔵来質問学制

廿三日　雨降○侍書○隄省三来○松平氏少女菊／就余学字○前日琉球使人陛見　詔封琉

（五二表）

球王尚泰為琉球藩王班華族妃為夫人賜／物正副使賛議官皆賜物有差尚泰及夫／人有所献

廿四日　雨猶不止○午後乗車赴厚東観劇約／小松謙次郎在焉云大昨日自浪華来厚／東交野妾阿勝等皆来十郎不至○高島／張輔来云近日将返郷○小松謙次郎贈茶

廿五日　雨歇招魂社祭以雨延到今日競馬場人

（五二裏）

集如堵○山県蔦蔵来省相見○方荣新吾／来○為落合源蔵高島張輔作書画張輔／装余康（戊）申所書高千穂詩丁卯所画高千穂／行勝山一字山図庚午所書題字作巻乞題／其後為作数語

廿六日　拝石来贈三洲陽文小連印一顆請観余／所蔵葛無奇李今生画巻○落合源三今／（称済三）柬乞書字○高島張輔来○飯島生来

（五三表）

○秋月新太郎竹中寛各携其妻来　北堂／静妹誘到招魂社而帰供酒飯到暮去○／杉山山口来話○加藤直鉄来○辻忠兵衛／阪井直常大木近智来不見○　家君有／微恙柬橋本乞来診

廿七日　橋本来診　家君○野邨致片山喜八柬／云正木市太郎齋至○阪井直常来○阪新／吾来○蓑虫来乞字画○昨日師範学校

（五三裏）

開教場今日将造観不果○文部定額之事／大蔵省猶有異議余甚惑焉今日富強之本無／不由学天下之財罄之学事不為過矣則区々争／二百萬抑不知本之甚吾甚惑焉前日兼米人／有悉還馬関償金以

助我学政之費之議外国／人愛我邦知其本如此大蔵省之愛国不如／外国人豈不異哉

廿八日　高島張輔来○以病不上衙不侍書以朝鮮

（五四表）

筆三枝送致侍従奉之　御前○以病辞杉山氏／招○青木錦邨来○川上冬崖来有所請○東／秋月氏言買宅之事○瓜生寅来○雲林院秋圃／来云将返肥後○渡邉修斎来不見○為拝石／書一聯日襄陽拝石非狂客楊子雕虫亦壮夫

廿九日　数日前省中上行太陽暦議○渡辺脩斎／東告将帰国○観師範学校○隄省三来○夜与／家君賦詩得五古一首○脩斎東中云昨夜盗

（五四裏）

入其家

十月

朔日壬子　辻権中録来見乞字○大庭一平来○宍戸／璣東乞書画○秋圃来書柁山九江所曾托清／人画冊題字托致秋圃贈筆一枝○阪新吾来／○家君命作画山水　家君傍観有七古一首

二日　余及野邨辻有分巡八大学区之命余受／第四第五第六三区未定発程之日○上衙途上

（五五表）

与宮木勘七遇聯騎行話勘七今為陸軍官／員居市谷○聞白華之洋行不得官許全係逃／亡而東本願寺主亦在行中余不知其情因其／請東海外諸友不止其行甚愧聞官厳命追／還之未知其著落○加藤有隣来省相見

三日　雨大降○侍書遇吉井幸助言竹中寛事／吉井許諾○家君病痊○有琉球王尚泰／以一等官礼待之之令

（五五裏）

四日　井上大輔報其母病歿与杉山行弔○夜大／庭一平東云白石氏老母以前月十八日死敢告／○大洲鉄然来贈菓子乞画○広瀬孝青／木先孝来不値

五日　四郎弟再拝文部十二等○退省後到京／橋山城屋命製洋服到海外堂買沓○鉄／然来○正木市太郎来

六日　朝微雨同四郎弟訪大庭一平弔其喪与

（五六表）

四郎弟別弔三浦五郎母喪訪渡邉脩斎而／帰○秋月父子来相居遂決買東隣○宮木／勘七来○飯島某来○白川県人木下真弘来／訪真弘旧称小太郎真太郎今為教部官／員○坂井直常来○宍戸璣言渡辺脩斎／之事

七日　引疾不上衙○数日前晋之丞上野弥平上／海東至是日作荅東○宮内省牒曰明日

（五六裏）

駕幸飛鳥山以故止侍読○夜吉雄敦来贈／菓子○秋山良助来見○橘門翁東曰梅援／結援等字見葛原詩話

八日　引病不上衙○秋月新来買宅之事成○／山口謙来言岡竹城

事云希望余保薦七等／官余云錯了余将尽友誼耳如其官等決／不可必況奏任乎余何権保人○彦山人吉／田宗澄帯其兄吉田正弼（称雲八）東来贈菓子

（五七表）

聞彦山主母観晃院氏四月歿山主教育八月／歿○遠田澄庵東贈所獲小鳥数十○青／浦来○久保断三正木市太郎来○橘門翁／東言竹中寛事○聞東京府令禁娼家買／人○省中貞靖来

九日　不上衙○橘翁東乞自画題句荅東云賤恙／労長者存問媿悚甚深今已復常但疎嬾不／出戸耳尊画題句不敢違命詩書皆拙却為

（五七裏）

点汗茉莉謹視燥湿以待長者移居之日／石印一方刀法頗可観敬呈左右笑収為幸竹／中氏事屢承尊問不敢耽閣近日応知其成／否題画曰樹色含昕気嵐光忽紫紅煙雲足／供養邱壑満胃中○三潴県石井瀧次来／見云過馬関京師与田代俊次広瀬範治南／摩綱紀等相見来此僅四五日廈林外氏為／設蒲萄酒瀧治贈詩曰家向功名場裡移不

（五八表）

知別後有何詩月痕初出秋空爽楼角芭蕉／立似旗○辻新次来話○松平晋之丞妻父来／見○津久井遠乞地方順覧序

十日　撰随行録官○以岡竹城希望意告杉／山勧其自解○雨過夜来風甚猛寒威驟／生○夜大庭一平拉其子一介陽次郎来見云／昨夜至一介云田代俊次放蕩不検束学童／皆引去山根秀介免吉田外一代宰馬関

（五八裏）

○左院官制改正大蔵勧農寮正筭愚筭司廃

十一日　竹中寛小栗憲一来話○坂井直常来／贈酒○隈従四位来見贈菓子○隈省三来／○鹿島仙洲老管又兵衛贈鮭魚及魚卵／云自北海道帰○斎藤拝石来

十二日　雨下冷甚○今日廃雇外国教師諸学／校之議決○石川県大属加藤恒来詢学／事○定額金事猶有異議政府欲減七

（五九表）

十萬金○式部寮牒曰明日第十字礼服／造　朝○菊永頼太郎及子範介来見不値

十三日　十字造　朝式部寮伝令授余文部大丞／畢詣宮内省拝謝○上衙撰随員静間大録／松岡哲夫○一字到　宮侍書以余発期在近／告之宮内省○先是　家君欲為静妹得一贅／壻隈正勝以滋賀県人広瀬進一為選進一／元為僧今為正院八等出仕在記録局家君

（五九裏）

許之乃撰今日正勝引進一到余家行礼神／原精二亦来酌酒至夜深○是日野邨素介／為大丞西潟訥為少丞

十四日　引病不上衙○渡邉定大庭一平来○橘／翁与竹中寛来賀余進任○聞花房猶在／朝鮮朝鮮人不敢接応花房使人帰請命／命于朝前日井田五三為理事之支那牛荘盖／亦探朝鮮形状也

（六〇表）

十五日　在衙橘翁東曰昨日偶話天下第一無用長物／方在小田県分庁前展観請一来寓目昨日橘／翁云旧福山藩所蔵玄宗泰山碑墨本長／十餘間真無用長物聞小田県献諸／朝非廿四人不能抗余因往観之真巨大無匹／横二丈竪殆五丈上有四大字曰紀泰山銘下／数百字大方三寸皆隷字末曰大唐開元云々／橘翁竹中寛来同観○帰路訪野邨云

（六〇裏）

至横濱○雨下○青浦東請売秋谷墨竹

十六日　青木先孝西坂成一来成一設学校数所于／東京其父天爵曾刻女四書成一欲訳之以／便女子○阪新吾吉田宗弼来○夜与家君／進一四郎弟賦詩○秋月新谷亮三各拉／其妻来○河内人田中英一来致堀井頑／仙四月東頑仙請書画

十七日　菊地義太郎来○方荣来○浅沢清

（六一表）

風来○大分県臼杵人橘朴来致吟松六月／東○宮内省牒曰明日賀幸延遼館見／魯国親王以告○魯国親王数日前到横／濵昨日来東京舎延遼館今日入　朝

十八日　淡渓来○諫早巳次郎来

十九日　須原屋鋏次郎来○安藤格三来為木／原寅三者乞字○阪井直常来○青浦東／言秋谷墨竹事

（六一裏）

二十日　東青浦付金二十円○長崎骨董人京井／梅嘯来乞字画○阪新吾来○加藤直鋏／来不値○為　家君作山色雲心図成

二十一日　橘門翁来云今日移居既而新夫妻及／谷浅沢等皆搬運家具至而買宅之事頗／有紛紜午後始決○岡千吉来云将従久保／断三到名東県又云片野瑜病危蔦○坂井／栄輔塩見真来○斎藤拝石中邨某来

（六二表）

○広瀬進一堤正勝来○到秋月氏新居／遂到交野氏問病云十二日以来病俄劇半／身不遂言語不明到今頗佳然察其形状尤為／可虞帰路訪青浦○暮秋月氏新居招飲／○久保断三使山本幸兵来贈鳧○永原俊章／来不見○川田剛門人来乞字

廿二日　岡山県人ママ来○宮内省牒曰、明日　／駕幸横濱、故報○遠田澄庵来、言愛知県

（六二裏）

人荻洲某事

廿三日　雨甚引病不上衙○大阪河内屋吉兵衛東／至云梅外詩抄十五部送致本町山城屋氏

廿四日　引病不上衙○阪新吾来○天野御民東／贈烟草○東品川領事于上海

廿五日　不上衙○四郎云、今日正院有令、以教部／省合文部省、進一云、嵯峨小野天野等皆免／宍戸黒田、以原官兼文部大少輔／○夜微霰

（六三表）

廿六日　天気晴朗、将游染井王子、　家君北堂静妹／蝶児阿齢秋月翁及士新妻同出、進一省三西／養寺亦倶、先後駕車到染井、入木戸氏別荘、／小憩、出観染井菊花、染井戸々皆以売花為／業、到秋時、家々争種菊以引客、多聚植菊／花、以造人物禽獣凡百形勢状、其俗可笑、茀／一家造月兔搗薬状、皆疾首走出、不復見別家／到王子、飛鳥山紅楓皆散、時有一二枝猶鮮

（六三裏）

入扇屋、飲酒喫酒（※別紙添附　飲酒喫酒厚本ノ誤）、与細川潤二郎相見、既而／四郎弟与士新騎而来、酒罷、衆或賽稲生／祠、余与進一省三、到瀧川、入金剛寺、川屈曲過／寺後、藍碧可愛、両厓多楓、葉已脱、茶店／寂寥、数客吹烟耳、出就来路、駕車而帰／衆皆先返矣、○広瀬林外石井竹陽来、○島田／泰夫菊永昌英蜷川式胤来、不値、○山城屋／送致梅外詩抄二十部○白川県参事山田

（六四表）

武甫来不見

廿七日　大木卿伝宣旨曰、文部大丞長芽、兼任教／部大丞、教部之与文部合、猶両立也、盖政府／難遽廃教部、故姑以摸稜処之也、宍戸黒田始／来文部省、○阪新吾来、○宮内省牒曰、発程在／何日、○宮内省牒曰、明日　駕幸赤阪離宮、敢／告

廿八日、　午前到教部省視事、午後到文部省、○上

（六四裏）

法書三冊○秋月父子婦来○渡邉定来○杉／山東借学制草稿、

廿九日、　教部省官員加藤九郎来見、見之即澈雲／也、贈墨一笏、云、一昨年来因丸山作楽事、受府／嫌疑、久得釈、後為兵庫県吏、近日因宍戸／大輔、出仕教部省、○明日将徒庁于教部省、／○河瀬秀治来見于省中、○片山重範来、言／島田泰夫事、○是日雨大下

（六五表）

晦日、　移省庁于教部省、合視文部教部事務／○淡渓木下靖竹中寛松岡哲夫来、為淡渓／等作字○小松謙二郎来、不見、○青木先孝／来○夜訪秋月氏、小酌、

十一月

朔日、　頴川君平（壬午）来、為長埼人長川東洲、乞其／所著読外史餘論序文、贈加羅寸美○河瀬／秀治来詢学事、○島田泰夫来見、島田豊後

（六五裏）

森人、久居偕中、曾為倉敷県参事、今閒居／小日向、橘翁亦云、其人非凡庸、可用、○木下真／弘来○加藤九郎東○隄省三大庭景明渡／邉定来、○青浦東云、容堂公遺物書画／数事、将出売、明日請来観、○上邨右一来、／不見、

二日　引疾不出○阪新吾神原精二来、○京駒来／乞字、

（六六表）

三日、　侍書、○松岡時敏東言間埼琢二郎事／○田邉巖介林外

東来見、云林外門人、香／川県人、○衙散、訪青浦、観容堂遺物画、

四日、東野邨約七日必到省、○帰路邉玉川堂／○青浦来○新太郎来

五日　白川県参事山田武甫来、詢学事、○香川県／人中西金蔵来○吉田宗弼来○与卿論教部／省事、○小栗憲一来○西潟訥来話○隄省三

（六六裏）

来○山下七三郎来

六日　木原寅蔵者来見、云偕前人、与安藤覚三／有旧、○教部省出仕安達顕加藤九郎来／○青木簡一来○訪野邨正素霎話而問交／野瑜疾、頗閒、出駕車、訪広瀬林外、家君進／一及加藤九郎在焉、少話、与九郎進一別、陪／家君而帰、瀧次随至、同為林外、観居宅／○佐藤信寛来、不見○阪井直常来別、贈

（六七表）

海苔○飯島半十郎来

○七日、引病上衙、大木卿柬曰、明日有議事、請／造省、○石井瀧治来、為林外視相宇、○山内／昇来、不見、○西潟訥柬乞画、

八日、河瀬秀治来、云帰県、○以省務多煩不／侍書、○竹田忠質来、言間埼琢一郎事、○／雨又下、○青浦柬、示張看雲山水冊

九日　改太陰暦行大陽暦之詔下、○府県委托

（六七裏）

金額定、○山内昇来省中、相見、○訪秋月翁、／与島田泰夫相見○昨日五小区市衙伝柬／京府令、出借地准書、今朝忘之、因遣四郎／弟于市衙、言其故、且托代致、胥云、明日午前／直出之于府庁、○与野邨言省中事、明日将／言之于卿、

十日、同埜邨言教部事于大木卿○三浦五郎来

十一日、終日謝客不見○阪新吾竹中寛来○隄省

（六八表）

三来、先是欲為四郎弟娶妻、省三云、永井喜／暉者、有女二人、此日与四郎弟往看之○教／部省深沢淳輔者来不見○庄田胆斎来／贈奥産木印材及竹根印材、不見○夜徴歌／常磐津曲者、招秋月松平氏全家

十二日、以病不上衙、○梅本来、云前日到朝鮮、／問以花房等事、曰、軍艦二隻皆帰矣○夜／隄省三来話、○前日来東京府令除濠端雑

（六八裏）

店、又使市街人家之前檐出于溝水外者、悉剗／去之、

十三日、侍書、○省中接真鍋豊平柬、豊平往大／坂、余十八九年前在大坂、与棚橋大作、数到／其家、豊平善一絃琴、余有贈詩、○橋本軍／医来、○長州山城屋彦八来○岐阜県人安／田獲来○大礼盛服及通常礼服之制下／廃直垂上下、従前衣冠

以為祭服、

（六九表）

十四日、　磯村定之来、定之旧称卯之助、山口県人／○伊藤弥次郎自横濱東、還金百五十円、云／餘金當以近日償之、○児玉貞斎東至、其子／貞介帯来、不値、貞斎延陵人、十五年前、余同／春堂弟游日州、廁其家月餘、時貞介才四歳／今已来游学、而春堂弟則亡矣、悲夫、貞斎／贈松魚及乾香魚、托其子、就学之事、貞斎／業竪、其東中有贈余小詩、事及行滕山事

（六九裏）

為之想像昔游、惘然之久、

十五日、　退衙、同野邨西潟、至大木卿家、大議省／務、遂及国評、有酒肉之饗、日暮帰、○東西／島青浦還弥次郎所返金百五拾円于木戸氏／○夜詣秋月氏、新太郎妾前日生女、其妻取／養之、妾乃放去○大昨日東土方久元言岡／節事

十六日　斎藤栄児玉貞介等来、不見○三條家人

（七〇表）

大谷茂樹東致棚橋衡平東、中有大作東／及贈余五言古詩一篇、先是衡平云、家兄有／三児、欲使長子就学、苦家貧、余諾助其学資／故東中謝其辱○松岡哲夫浅沢清風来、

十七日、　推窓暁光皎然、夜来雪大降、已積五寸／聞昨夜神田火、絶不知也、○政府重令曰、文部／教部二省合併、乃移上局于文部、与教部／別、余輩猶兼任、

（七〇裏）

十八日、　引病不上衙、不侍書、○隄省三来、○児玉貞／介来見、云入湯島進文学舎、○大庭一平来

十九日、　不上衙、○石井龍治広瀬孝来、広瀬贈／糟醃香魚松魚海苔、○野口貞一来、

廿日、　宮内省牒曰、今日以後、宮中以歳晩停事、不／須侍書○白川県参事山田武甫来詢学事、○／昨日岡山県人西毅一来、○山城屋彦八来、○菊／池隆棟来、○宍戸黒田二輔出省視事、余

（七一表）

輩皆主任文部事、

廿一日、　山口謙隄正勝来、○夜地震、

廿二日、　新嘗祭賜暇、○陪家君出到西河岸、訪須原／屋、量平自長州返、致半雲所寄画扇、及三輪／伊兵衛東、観書画数事、出過市街、到新橋、過／久保町、訪竹中寛、不在、出過八官町、循濠而／帰、今日、路逢西養寺主、○阪彬来、贈水仙、／不値、○秋月新東言竹中事、○白川県人林

（七一裏）

正明者来致連城自英国東、云自欧洲還、不／値、連城東中切言外教之害、又曰、支那留学／生徒、皆已卒普通学者、及来西国、即入大学／是言或不信也

廿三日、　品川領事自上海送筆三十枝至、前日東／中托買、　上

臨池所御也、○岡本霞兄来贈／新刊墨林今話名録二部、
廿四日、 進筆三十枝于宮内省、○品川領事東

（七二表）

三宅庸助松平晋之丞東至、盖与昨日所送／筆俱也、○長川新吾来見、東洲子也、前日因／潁川君平、乞読外史餘論序者、○林外来、云／移居于神楽坂上岩戸町、
廿五日、 矢田宏自大分県東曰、某今六月中、事釈／出獄、悵然無依、甚悔従前頑愚、洗心欲入京／仰倚厚庇云々、以十月廿日発東、紙筆如新、只／有東京郵便之印、想宏已来京、故作此東

（七二裏）

以欺余也、○是日以改暦告 神武天皇神位／賜暇群臣、午後礼服到吹上、拝 皇霊祠、／祠前新架鉄橋、自 皇宮通吹上、壮麗／無比、○前日清原宣道自長埼東○昨日／搗糕
廿六日、 以歳晩多事不賜暇○山県初三郎来○／石川県人野口磊三来○元宮津県人梅邨疎／影来、示広沢書二巻、○山下七三郎来、○

（七三表）

白川県参事山田武甫送致其県人某暦／法建白書、
廿七日、 福岡県権典事大谷靖来見于省中諮／学事、○木戸氏室氏来、
廿八日、 不上衙、○尼埼僧日経来見、問生香老／人、曰、猶能篆刻、○贈木戸交野山県隄杉山氏以／鶏卵、饋歳也、○五條侍従来、不見、
廿九日 雨下、賀歳晩于宮内省、到文部省、受判

（七三裏）

任官拝賀、○林外来、○浅沢清風松本譲／来○小松謙次郎来、○夜謙次郎東請借金／乃返百金、

十二月

朔日、辛亥阪彬来、云、前日小飲酒店、有客同席、／問其姓名、云、南部人江堵五郎、与之談、自云／居伝通院、生平数干齟譴、在獄五年、遇赦／得生云々、其語及松陰蕭海、五郎素有詩名

（七四表）

松陰北游日記称安藝五蔵者、南部仙台等／之叛、五郎頗為其謀臣云、今猶存在、居都下／不知何意、○日高頼長神原精二、松勘等来／不見、○小松謙次郎東拝昨夜之辱、且曰、山／城屋和助昨日八字自殺陸軍省中、余大驚、不／知其何故、○長州大寧寺僧某来不見、○青／木咸一来、不見、
二日、 鉄然川田甕江来、不見○鷹羽恭一者来、

（七四裏）

元彦山人、今住勢州松坂、云得眼疾、欲乞涛／弗満氏治、因余請介、為東杉山、杉山不在、乃東／東校○広瀬進一来、○日暮訪林外秋月、○／夜新太郎来、問山城屋和助事、云借陸軍／省

金十五萬円不能償、故以死謝也、○恭一／贈海鼠腸○明日行太陽暦、故以明日為明／年一月一日、今日為除日、

※以上

註

（1）松本白華は東本願寺の僧侶で、天保九年十二月十三日（一八三九年一月二十七日）に加賀国松任の坂本山本誓寺に同寺第二十四世達命の次男として生まれた。幼名は隼丸、名は厳護、白華・西塘・林泉・孤末・仙露閣と号した。

嘉永三年（一八五〇）に、京都で宮原節庵に書を、海原謙蔵・劉昇に漢学を学び、嘉永五年（一八五二）に大坂の広瀬旭荘塾（大坂咸宜園）に入門し、咸宜園門下の長三洲・劉石秋・柴秋邨らと出会っている。

幕末維新期、諸宗同徳会盟に参加したほか、明治二年（一八六九）には金沢に流刑された「浦上四番崩れ」のキリシタンの改宗活動や、明治三年（一八七〇）に発生した富山合廃寺事件では、佐田介石（西本願寺）と現地に赴き実況見分にあたった。

明治四年（一八七一）、白華は小栗栖香頂や、その弟の小栗憲一らとともに、東京で宗名恢復（一向宗→浄土真宗）に従事した。

当時東京では、秋月橘門や長梅外ら咸宜園出身者を中心に漢詩結社・玉川吟社が結成されており、白華もこれに参加した。白華はここで漢詩文による交流を行ったほか、主宰者の一人である長三洲（長梅外の子）を通じて、江藤新平との関係を構築することに成功した。

白華は明治五年（一八七二）から明治十年（一八七七）まで教部省の官吏をつとめたが、この間、明治五年（一八七二）九月から約半年間に亙って新法主・大谷光瑩（現如）、石川舜台、関信三、成島柳北とともに海外視察を行っている。明治十年（一八七七）から十一年（一八七八）まで上海別院輪番をつとめ、明治十二年（一八七九）に帰国後は本誓寺に戻り遙及社を再開し、宗教（真宗学）を中心とした地元子弟の教育にあたった。

明治四十三年（一九一〇）、本山議制局議長に就任し、明治四十四年（一九一一）に権僧正、大正十四年（一九二五）に僧正となり、大正十五年（一九二六）二月五日に歿した。享年八十九歳。

著書に『正因弁惑論』（明治十七年）が、漢詩集に『金城繁華三十闋』（明治四年）、『西塘俚歌』（明治二十二～二十四年）、『越蓑能笠』（明治二十二年）、『白華餘事』（大正二年）がある。歿後に洋行日記『松本白華航海録』（明治五・六年、本誓寺蔵。柏原祐泉編『真宗史料集成』第十一巻（「維新期の真宗」、同朋舎、昭和五十年）などに翻刻）、『白華護法録』（大谷大学国史学会、昭和初期）、『白華備忘録』（大谷大学国史研究会、昭和八年）、『白華教部省雑纂』（同、昭和九年）、『露珠閣叢書』（常盤大定編輯『明治仏教全集』第八巻、春陽堂、昭和十年）、『備忘謾録』（同）が翻刻されている。

（2）小栗栖香頂（一八三一～一九〇五）は、豊後戸次・妙正寺住職の了堅の長男に生まれ、八洲または蓮泊と号した。咸宜園の三才子といわれ、弟の小栗憲一（号布岳）も咸宜園出身であった。維新後、本山を東京に移転することを提唱した。明治六年（一八七三）七月渡清、北京で中国語を学ぶかたわら、

日本・清国・印度で仏教三国同盟を結び、キリスト教に対抗することを説き、翌年八月帰国した。この間、弟の小栗は香頂からの書翰を編輯して「支那開宗見込」を本山に提出し、清国布教を提言した。明治九年（一八七六）七月、再渡清し東本願寺上海別院開設に関わる（～十年一月迄）。著作に『真宗教旨』・『北京護法論』・『喇嘛教沿革』などがある。

（3）田原法水は天保十四年（一八四三）十二月十五日、豊後国大野郡井田村字長峰の常満寺前住職欣浄の二男として生まれた。矢田希一（速見郡石垣村）が設立した塾で塾長の長南梁（梅外）に、慶応元年（一八六五）に咸宜園に入門し広瀬林外に漢学を学ぶ。明治元年（一八六八）に細川千巌（筑後国竹野郡伯東寺）に、明治六年（一八七三）に大分小教学院で小栗栖香頂に仏学を学ぶ。明治九年（一八七六）以降は当時浄土真宗が禁教であった琉球で布教に従事し、明治十年（一八七七）に同地で発生した真宗法難事件に対処した。のちに那覇に設置された真教寺第一世住職となり、同地での監獄説教や免囚保護事業にも尽力した。

（4）小栗憲一（一八三四～一九一五）は、豊後戸次・妙正寺住職の了堅の次男に生まれ、元園のち布岳と号した。弘化四年（一八四七）咸宜園に入門し、その後帆足杏雨に画を学び、嘉永六年（一八五三）京都高倉学寮に学ぶ。幕末維新期にかけて、長崎などで教会に諜者を潜入させるなどの対キリスト教活動に従事した。維新後は、明治二年（一八六九）に弾正大忠をつとめ、明治四年（一八七一）には宮内省権大録となり、同年宗名恢復に参加する。監部を経て教部省九等出仕（明治五年七月五日）となり、明治八年（一八七五）に大蔵省へ転じた。真宗京都中学校長や善教寺住職をつとめた。明治十一年（一八七八）に琉球を、明治三十一年（一八九八）に韓国を訪れている。著書に、『豊絵詩史』（西村七兵衛、明治十七年）・『真宗興隆縁起』（哲学書院、明治二十五年）・『小栗栖香頂略伝』（明治舘、明治四十年）などが、漢詩集に『布岳懐旧詩史』（明治舘、大正四年）ある。

（5）奥村圓心（一八四三～一九一三）は、唐津城下の高徳寺に生まれ、咸宜園に学び、朝鮮・千島布教に従事した。漢詩集に、『釜山詩稿』（刊年不明）がある。朝鮮布教・愛国婦人会設立に尽力した奥村五百子（一八四五～一九〇七）は、圓心の妹にあたる。

（6）咸宜園は、江戸期に広瀬淡窓によって豊後日田に創設された漢学塾である。淡窓は文化二年（一八〇五）春、豊後日田・長福寺（東本願寺）の学寮を借りて教育活動を開始した。同年八月には、町内の町家を借りて成章舎と改称した。文化四年（一八〇七）には更に移転して桂林園と改称し、文化十四年（一八一七）に咸宜園と称した。天保元年（一八三〇）四十九歳の時に、弟の広瀬旭荘に経営を譲るが、天保七年（一八三六）に旭荘が堺さらには大坂に移ったので再び経営にあたる。咸宜園はその後、広瀬青村・広瀬林外に引き継がれ、明治三十年（一八九七）に廃止されるまで約九十年間存続した。梅原徹『近世私塾の研究』（思文閣出版、昭和五十八年）によると、塾生は全国から集まり、実に四六一七人にのぼり、「近世最大規模の私塾」であった。

咸宜園独自の教育体系としては、入門者の年齢・学歴・身分を剝奪し平等に扱う「三奪法」や、毎月の勉学に成績によって等級を定める「月旦表（評）」（十九の等級に分類）などがあった。また、藩校や昌平黌とは異なり、他藩や農民・町

人に対しても門戸を開放しているが、注目すべき点は僧侶が多いことである。

井上義巳『広瀬淡窓』（吉川弘文館、昭和六十二年）によると、淡窓時代五十年・青村時代七年・林外時代十年を通じて、入門者の合計を四一一二人としているが、うち僧侶は一三九三名（三三・八％）と指摘している。さらに入門簿からは宗派まではわからないものの、真宗勢力の強い地域（長門・周防・安芸・摂津・美濃など）からの入門者が多いことを指摘し、僧侶の三分の二は真宗、その残りの半分を浄土宗、そして禅宗が続くと述べている。

（7）幕末維新期に活躍した主な咸宜園出身の真宗僧は次の通りである。

〔東本願寺〕

釈徳令（筑後八女・光善寺、修文館を主宰）・平野五岳（豊後日田・専念寺）・唐川即定（咸宜園塾主、真宗大学教授）・小栗栖香頂（豊後戸次・妙正寺、中国布教）・小栗憲一（同、真宗中学校長・のち善教寺住職、琉球・朝鮮布教、香頂の弟）・関信三（三河一色・安休寺、猶龍のち安藤劉太郎、白華とともに海外視察）・雲英晃耀（同寺、高倉学寮擬講、関信三の兄）・渡辺徹鑑（三河若林・浄照寺、上海別院輪番）・伏成（伊豆三島・成真寺、護法場寮長）・奥村圓心（肥前唐津・高徳寺、朝鮮・千島布教）、田原法水（豊後大野・常満寺、琉球布教）・武宮現真（肥前・真光寺・琉球布教に尽力）・松本白華（京都劉昇塾、大坂旭荘塾、海外視察・中国布教）・白川慈孝（劉石秋塾・大坂旭荘塾、本山改正掛）。

〔西本願寺〕

月性（周防大島、妙円寺、勤王僧、咸宜園客席生）・良厳（越前・唯宝寺、のち石丸八郎、教部省十一等出仕兼中講義）・赤松連城（周防徳山・徳応寺、維新後渡欧）・普寂（肥後鹿本・明照寺のち熊本・浄行寺、のち清浦奎吾、第二三代内閣総理大臣）。

（8）白華文庫は、白華歿後の昭和二年（一九二七）、本誓寺の境内に鉄筋コンクリート二階建ての書庫として建てられ、白華の旧蔵書等が収蔵されたが、のちに松任市中央図書館（現白山市立松任図書館）へ移管され、『松任本誓寺　白華文庫目録』（編修松任市中央図書館、漢籍指導大沼晴暉、昭和六十三年）が刊行された。

（9）長三洲は、天保四年（一八三三）九月二十三日、長梅外の長男として生まれた。弘化四年（一八四七）に咸宜園に入門し、遅くとも安政二年（一八五五）三月には白華と出会っている。万延元年（一八六〇）、長州藩士となり明倫館講師をつとめ、文久三年（一八六三）に奇兵隊に入隊し、翌元治元年（一八六四）には四国聯合艦隊と交戦し負傷した。戊辰戦争に従軍し、明治三年（一八七〇）に上京し、太政官権大史として制度局に入り、江藤新平の知己を得た。同年、「新封建論」を世に問うて廃藩置県に寄与するところがあり、以後良好な関係にあったと見られる。大学少丞兼制度局出仕となった長三洲は同年四月、小曾根乾堂とともに清国との条約締結交渉にあたる伊達宗城・柳原前光に随行しており、帰国後は新設された文部省に六等出仕した。

（10）川邉雄大・町泉寿郎「松本白華と玉川吟社の人々」（『日本漢文学研究』第二号、二松学舎大学21世紀ＣＯＥプログラム、

平成十九年）。

（11）拙稿「白華文庫蔵・小栗栖香頂「水築小相伝」について」（『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第四六集、平成二十八年）に翻刻する。

（12）拙稿「白華文庫蔵・平野五岳「五岳道人 古竹邨舎詩鈔」について」（二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢文教育研究推進室『日本漢文学研究』第一二号、平成二十九年）に翻刻する。

（13）拙稿「白華文庫蔵「真宗説教」について」（大倉精神文化研究所『大倉山論集』第六七輯、令和三年）に翻刻する。

（14）日田市教育庁咸宜園教育研究センター『咸宜園教育研究センター研究紀要』第九号、令和二年。

（15）太陽暦採用のため、明治五年（一八七二）は十二月二日が最終日となった。

（16）中島三夫『三洲長芟著作選集　付　作品目録・略伝』（平成十五年）。

（17）中島三夫『三洲長芟著作選集』（前掲書）。

（18）「日記」（二月五日）。

（19）「日記」（二月十五日）。

（20）「日記」（二月十九日）。

（21）「日記」（三月朔日）。

（22）「日記」（八月二十九日）。

（23）「日記」（十月二日）。

（24）「日記」（十月十三日）。

（25）「日記」（十月二十五日・二十七日・二十八日）。

（26）「日記」（二月二十七日・三月二十三日・四月二日・六月二十九日・九月十日）。

（27）「日記」（三月二十三日）。

（28）「日記」（三月二十四日・六月二十九日・八月十九日・十月十一日・十一月五日）。

（29）「日記」（二月十九日・十月四日）。

（30）「日記」（一月九日・十八日・二十日）。

（31）「日記」（一月二十日・十一月二十二日）。

（32）「日記」（九月九日・十一月二十日）。

（33）「日記」（九月二十八日）。

（34）「日記」（十月二十六日）。

（35）「日記」（二月十九日・十二月二日）。

（36）隈静斎（一八二六～一八九二）、名は正勝、字は威卿、通称は十郎・省三、豊後の人。弘化年間、咸宜園に学んだ。のち昌平黌に入り安積艮斎に学ぶ。元治元年（一八六四）幕臣となり、徒士目付を勤めた。慶応元年（一八六五）、征長戦争に従軍。明治十一年（一八七八）、飯田町に私塾知新学舎を設立。編著書に『玉川吟社小稿』（明治十三年）・『皆山閣詩鈔』二巻（明治十七年）・『北遊撮勝』がある（坂口筑母著『旧雨社小伝』巻二、幕末維新儒者文人小伝シリーズ第九冊、明石書房、昭和五十八年）。

（37）明治五年（一八七二）に白華が記した「松本白華航海録」（前掲書）の住所録によると、西島青浦の住所は「富士見町木戸公」となっている。

（38）『布岳懐旧詩史』（前掲書）に、「妹氏鴨子竹中寛氏に嫁して貞淑の聞えあり」とあり、小栗憲一の妹鴨子と結婚している。

（39）遠田澄庵については、川邉雄大・町泉寿郎「遠田澄庵の写真・肖像」（『漢方の臨床』五三号、平成十八年）を参照されたい。

（40）「日記」（九月二十一日）。

(41)「日記」（九月二十一日）。
(42)「日記」（一月十九日）。
(43)「日記」（九月七日）。
(44)「日記」（九月十八日）。
(45)「日記」（十一月三日）。
田辺巌介について、『読売新聞』（明治十二年八月十三日、朝刊一面）に、以下の記事がある。

云ふ事ガ真実で行ひガ厚けれバ、何処へ行くも四海兄弟にて、豊後日田の広瀬先生の門人で才子の聞えあッた愛媛県士族の田辺巌氏ハ、平生篤実な人で朋友の交際も深切にて、先年より出京して居たところ、脚気症に罹ツて終に去る九日、死去されたガ、同氏ハ府下に親族も無いので、学友や知己の人ガ寄ツて懇ろに看病から葬式まで取営んだといふガ、何でも人ハ平生の交際ガ肝腎であります。

(46)「日記」（九月六日・十月二十九日）。
片山重範（猶存）の事蹟については、町泉寿郎「小笠原島開拓碑とその撰文者片山猶存」（二松学舎大学人文学会『二松学舎大学人文論叢』第一〇〇輯、平成三十年）に詳しい。
(47)「日記」（十月六日）（十月八日・二十一日）。
(48)「日記」（十二月一日・二日）。
(49)玉川吟社は九段坂下を流れる玉川（日本橋川）、俎橋附近にあった玉川堂の貸席で毎月十六日開催されていた。吉田学軒「玉川吟社詩稿序」（明治二十九年、無窮会蔵「吉田学軒関係資料」）によると明治四年（一八七一）に、南史（石井南橋）「玉川堂会記」（『吾妻新誌』第一三五号、九春堂、明治十九年）によると明治六年（一八七三）に結成されたとされる。「日記」中に、玉川吟社の同人の動向や交流、玉川堂に関する記述はあるものの、「玉川」吟社という名称や詩会についての記述はない。そのため、「日記」の記された明治五年（一八七二）当時、まだ玉川吟社は結成されていなかったか、あるいは長三洲は多忙のため参加していなかった可能性がある。

現在、本誓寺には明治七年（一八七四）三月十九日から同年九月十五日の間にかけて撮影されたものと推測される玉川吟社同人の集合写真二葉（「松本白華と玉川吟社の人々」（前掲書）に掲載）が所蔵されており、以下の人物が映っている（括弧内は筆者註）。

〔写真①〕：松本白華・南摩綱紀・秋月得生軒（水築小相・秋月橘門）・長翁（長梅外）・池上一郎・吉雄敦・宮川清之丞・西嶌青浦・長大丞（長三洲）・斎藤拝石（以上、十名。氏名は写真欄外書込による）。

〔写真②〕：圯南竹冨先生・梅外長先生・拝石斎藤先生・香坂雲山先生・堤静斎君・遠田証庵君・長古雪君・長三洲君・竹陽石井君・小栗元園君・広瀬雪空君・青浦西嶌君・逵青君・秋月士新（新太郎）君・竹中煮雪君・白華在隠（以上、十六名。氏名は写真裏書きによる）。

(50)「松本白華と玉川吟社の人々」（前掲書）。
(51)「日記」（三月十日・十一日・二十一日）。
(52)白華の教部省出仕（明治五年二月）についても、長三洲の関与があったと想像される。

謝辞
本稿執筆にあたって、白山市立松任図書館・本誓寺前住職故松本梶丸氏には、資料の閲覧・撮影等に御高配を賜りました。厚く御礼申し上げます。

附記　本稿はＪＳＰＳ科研費 22K00085 による研究成果の一部をなすものである。

〈キーワード〉　長芠・咸宜園・松本白華・白山市立松任図書館・本誓寺